# 朝堂院朝庭の調査

## ―第179次

### 1　はじめに

朝堂院は、大極殿院の南に位置する回廊に囲まれた空間である。東西235m、南北320mの長方形を呈し、中央の広場（朝庭）を12棟の朝堂が取り囲むように配置される。朝堂院では、さまざまな政務や儀式が執りおこなわれた。

都城発掘調査部では、1999年度以降、藤原宮中枢部の実態解明を目的に朝堂院地区の発掘調査を進めてきた。これまでに朝堂や回廊の配置と構造をあきらかにし、2008年度の第153次調査以降は、朝庭の整備状況や藤原宮造営過程の全容解明にむけた調査に取り組んできている。

これまでの調査で、朝庭は礫を敷きつめて整備されており、儀式で使用する幢竿支柱と考えられる柱穴群や、排水用の暗渠などが設けられたこと、礫敷広場の下層には、藤原宮造営期の遺構（先行条坊、運河、溝、柱穴、沼状遺構など）が存在することが判明している。2012年度の第174次調査では、造営時の木材加工で生じたとみられる木屑を含む土層が、沼状遺構と重複する範囲に分布している状況があきらかとなった。

今回の調査地は朝庭の東北部にあたり、第107次調査区（2000年度）の西、第153次調査区（2008年度）の東、第160次調査区（2009年度）の南、第163次調査区（2010年度）の北東、第174次調査区（2012年度）の北に位置する。今回の調査では、礫敷広場での空間利用のあり方や礫敷下層における遺構の状況を確認することを主な目的とした。

調査は2013年４月８日から５月28日までおこない、約３ヵ月半の中断期間を挟んで、2013年９月17日に再開し、2014年３月19日に終了した。調査面積は1,430㎡、うち456㎡は既調査区（第153・160・163次）との重複部分である。

### 2　検出遺構

#### 基本層序

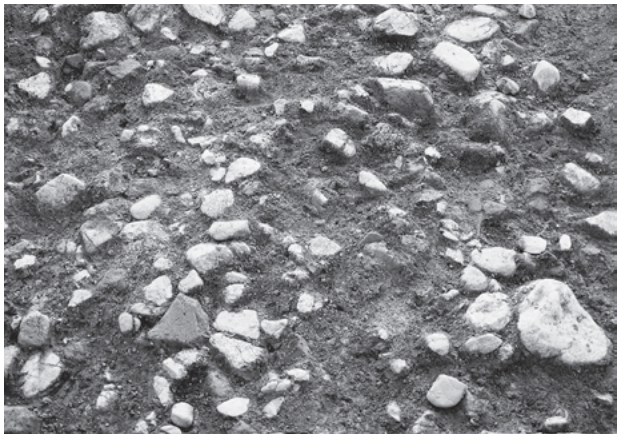
調査地の基本層序は、上から整備盛土（厚さ約80㎝、南約３分の２のみ）、耕作土・いわゆる床土（20～50㎝）と続き、床土の直下に藤原宮期の礫敷がある。礫敷より下は藤原宮造営期の整地土で、上から橙褐色砂質土（５～20㎝）、褐色砂質土（５～20㎝）、灰色粘質土（30～50㎝）に大別できる。褐色砂質土は、木屑を含むごく薄い粘土層を挟んでおり、それを指標にさらに細分することができる。地山は灰オリーブ色粘質土。地山上面の標高は、調査区東南部および西北部で71.00～71.10mを測り、北東に向かって低くなる。

これまでの調査成果に照らすと、灰色粘質土は、旧地形をならす目的の第一次整地土に、褐色砂質土・橙褐色砂質土は、朝庭の本格的な整備にともなう第二次整地土に相当する。橙褐色砂質土の一部は、礫敷広場の整備直前に施した最終整地土に相当する可能性もある。

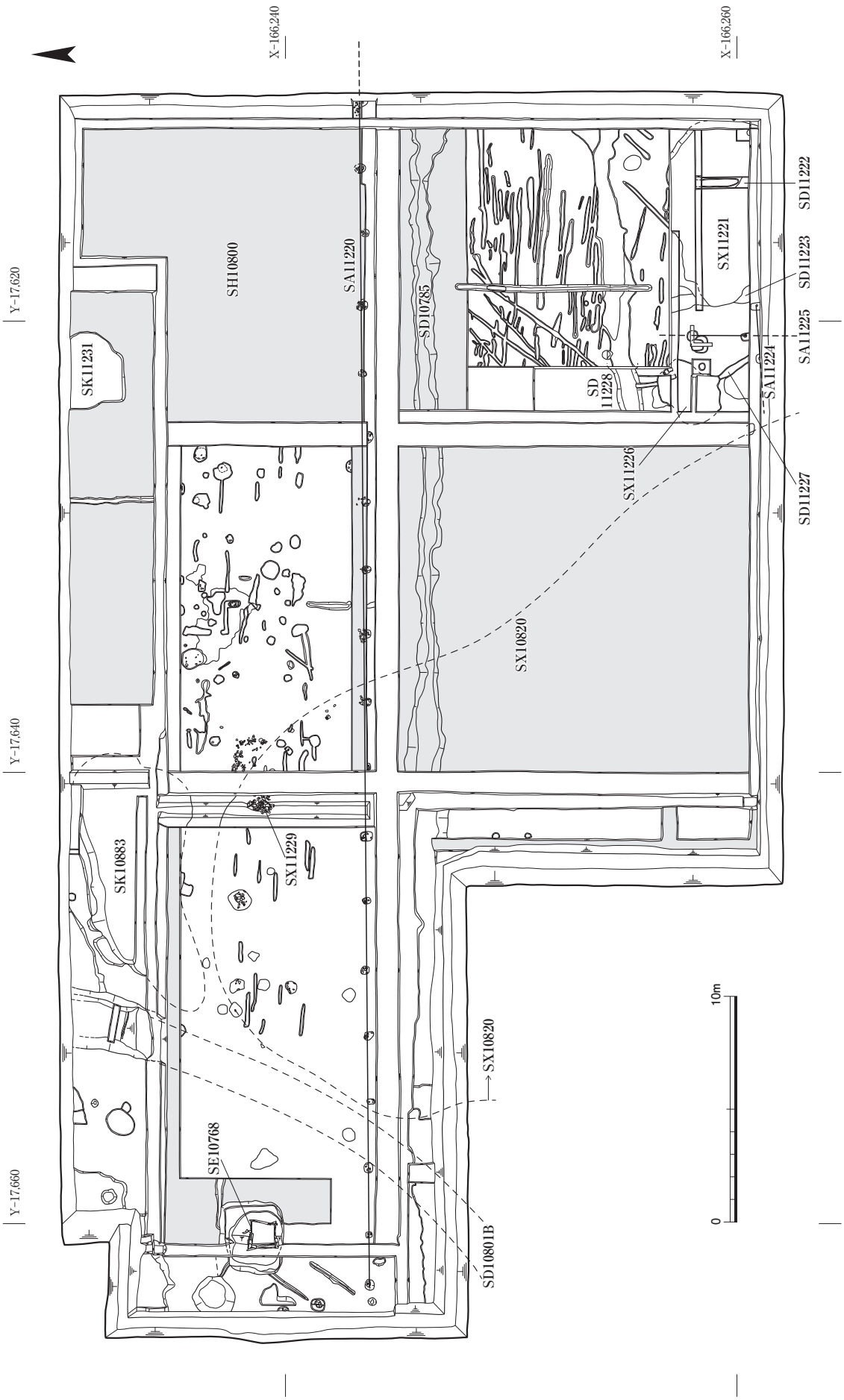
#### 藤原宮期の遺構

**礫敷広場SH10800**　直径１～８㎝程度の礫を敷きつめて整備された広場。調査区全域で検出した（図Ⅱ-２）。礫の遺存状況は場所により異なるが、土層断面によると、厚さはおおよそ３～10㎝。礫敷の上面は、調査区東南部が標高71.75m前後でもっとも高いのに対し、北辺部では71.50m前後と低くなっている。調査区中央の東西溝SD10785（後述）直上が窪んでいる点を除けば、全体として南が高く北が低い。また、礫敷面には起伏があり、下層の遺構や地形の状況を反映していると考えられる。

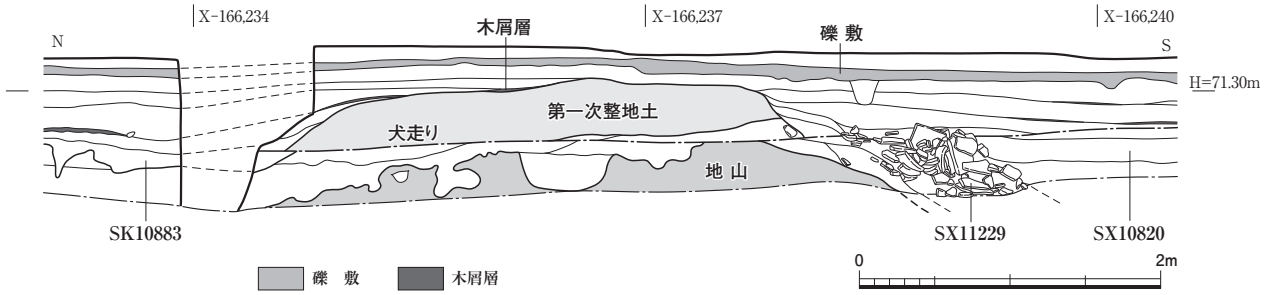
**東西溝SD10785**　調査区中央で検出した素掘溝。幅約1.1m、深さ約45㎝。第153次調査で検出した東西溝の東延長部にあたり、新たに約30m分を確認した。これまでに検出した長さは78mで、さらに調査区の東へ延びる。溝直上の礫敷面は、周囲に比べ５㎝ほど落ち込んでいる。底面は、Ｙ－17,641付近で標高71.50m、調査区東壁



図Ⅱ-２　礫敷近景



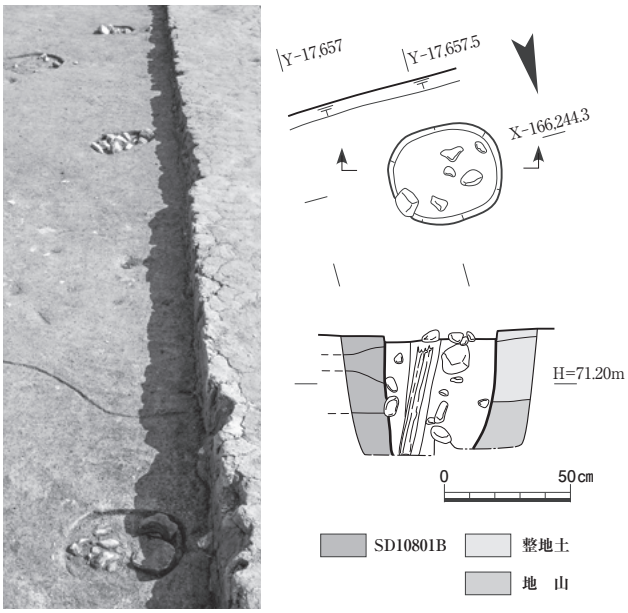

図Ⅱ-3　第179次調査遺構図　1：250




図Ⅱ-4　Y－17,641ライン断面図　1：50

で71.20mであり、東に向かって標高を下げる。底部には砂が３～５㎝堆積しており、当初は素掘溝として機能していた可能性がある。それより上は広場の整備と一体的に礫で埋め立てており、朝庭北端の暗渠として機能していたとみられる。

**柱列SA11220**　調査区中央で検出した東西方向の柱列。18間分（53m）を確認した（図Ⅱ-５左）。東でやや北に振れる。礫敷直下の整地土上面で検出したが、掘方埋土に礫を含んでいることから、礫敷上から掘り込まれたと考えられる。東側の柱穴11基は、掘方の北半分については礫敷を残し、南半分のみ礫敷を除去して検出した。柱穴直上の礫敷面は、周囲よりわずかに盛り上がっている。柱間は約３m（10尺）で、西端の１間のみ2.1m（７尺）。さらに調査区の東に延びる可能性がある。柱穴は直径30～40㎝の不整円形を呈する。深さは約50㎝。断割調査の結果、柱穴１基に直径約10㎝の柱根が残存していた（図Ⅱ-５右）。また、埋土に含まれる礫には、長径10～15㎝の大ぶりなものが目立つ。朝堂院北面回廊（大極殿院南面回廊）SC9000の中軸から、南に約24m（80尺）の位置にある。




図Ⅱ-５　柱列SA11220（西から）と柱穴断面図　1：30

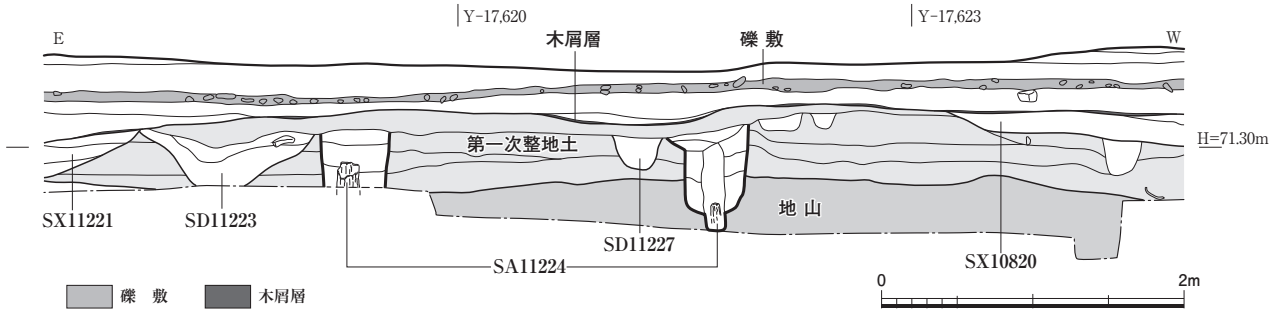
### 藤原宮造営期の遺構

調査区の西北部と東南部に下層調査区を設けた。遺構検出は、礫敷直下の整地土上面、第二次整地土中の任意面、および第一次整地土上面でおこなった。以下に述べる遺構は、いずれも第一次整地土上面、もしくは排水溝・断割トレンチの土層断面で検出したものであり、第二次整地土を施す前の時期に属する。

**斜行溝SD10801B**　南西から北東にむかって延びる素掘溝。幅約２m、深さ1.4m。大極殿院南門の建設にあたって、運河SD1901Aを東に迂回させた溝と考えられる[1)]。第153・160次調査で検出しており、調査区西北部の土層断面で再確認した。斜行溝直上の礫敷面は、周囲よりわずかに落ち込んでいる。埋土は、底面より20～30㎝は青灰色シルトで、溝機能時の堆積とみられる。その上には、厚さ５㎝ほどの木屑層が堆積し、さらに粘土ブロック・木屑を含む灰オリーブ色の粗砂～シルトと、粘土ブロックを多量に含む暗青灰色粘質土を20㎝程度交互に入れて埋め立てている。最後にその上を、厚さ５～25㎝の灰黄色細砂が覆う。灰黄色細砂は調査区西北部に広く分布する。

**沼状遺構SX10883**　調査区西北部で検出した。東西約10m、南北約５mの楕円形を呈する。深さは25㎝。第160次調査で北側の大部分を検出しており、今回南肩を確認した。埋土には瓦片や長径30㎝弱の礫・多量の木屑を含み、瓦片や礫は、概ね木屑の上面に面を揃えて並ぶ。その上を灰黄色細砂が覆う。これまではSX10820と重複し、それより新しい遺構と考えていたが[2)]、今回の調査でSX10820とは重複関係にないことが判明した。ただし、礫敷の起伏の様相からみて、西南隅でSX10820と接続する可能性がある。また、灰黄色細砂が敷かれた時点でSX10883はほぼ埋まっているが、SX10820はまだ埋まっていないとみられる。

**沼状遺構SX10820**　調査区西北部から西南部にかけて広がる、人工的に掘り込んだ窪地。第153次調査で西端を、第163次調査で西南端を、第174次調査で南端と東端



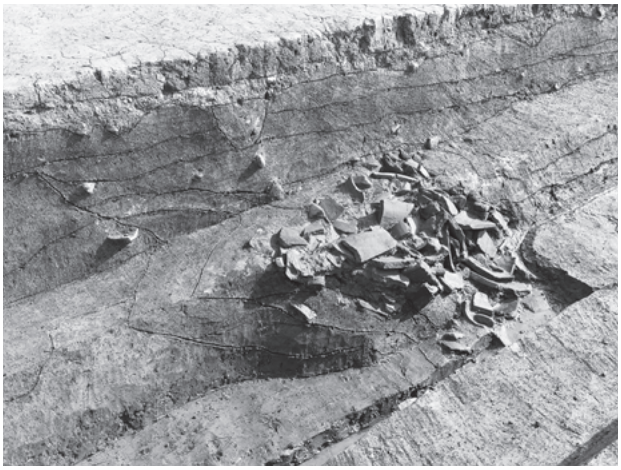

図Ⅱ-6　調査区南壁土層図　1：50

を確認しており、今回の調査で北端を検出した。これまでの調査で判明した規模は、東西約32m、南北約37m。排水溝や断割トレンチの土層断面で端部を確認したため、正確な平面形は不明であるが、おおよそ礫敷が沈下している範囲にあたり、西北―東南を長軸とする楕円形に近い形をとると推定される。深さは0.7～１mで、調査区西南隅付近がもっとも深い。埋土は、ほぼすべて人為的な埋立土である。底部から５～40cmは多量の木屑を含む黒色粘質土で、上面に起伏がある。それより上部は木屑を含む褐色砂質土で、第二次整地土と一連の埋立土とみられる。

**瓦溜SX11229**　沼状遺構SX10820の北肩付近に、瓦が集中して廃棄されていた（図Ⅱ-7）。東西0.80m以上、南北1.2m以上の範囲に広がる。深さは50cm以上。

**沼状遺構SX11221**　調査区東南部で検出した。東西９m以上、南北４m以上。深さは30cm。埋土に瓦や木屑を多く含む。重複関係から、南北溝SD11223より新しい。南は調査区外に広がり、第174次調査区の北壁Ｙ－17,617からＹ－17,622付近で確認している落ち込み[3]につながる可能性がある。

**沼状遺構SX11226**　調査区東南部で検出した。東西3.0m、南北2.8mの不整円形を呈する。深さは約30cm。埋土に木屑を含む。東肩付近からほぼ完形の丸瓦が出土した。重複関係から、南北溝SD11227より新しい。



図Ⅱ-7　沼状遺構SX10820北肩と瓦溜SX11229（北西から）

**東西溝SD11228**　調査区東南部で検出した素掘溝。幅1.2m、深さ約40cm。約15m分を確認した。東でやや北に振れる。礫敷直下の整地土上面は、溝直上では周囲に比べ５cmほど落ち込んでいる。埋土に木屑や瓦を含む。Ｙ－17,625.5付近と調査区東壁（Ｙ－17,611）とで、溝底の高低差はほとんどない。東はさらに調査区外に延びる。西は沼状遺構SX10820に接続する可能性がある。

**南北溝SD11223**　調査区東南部で検出した素掘溝。幅1.1m、深さ約40cm。約４m分を確認した。北でやや西に振れる。重複関係から、沼状遺構SX11221より古い。南はさらに調査区外に延びる。

**南北溝SD11227**　調査区東南部で検出した素掘溝。幅0.40m、深さ約20cm。約５m分を確認した。西に凸の緩い弧を描く。埋土に木屑を含む。重複関係から、沼状遺構SX11226より古い。北は東西溝SD11228に接続し、南はさらに調査区外に延びる。

**柱列SA11224**　調査区東南部で検出した。柱穴２基が約2.4m（８尺）の間隔で東西に並ぶ。西でやや南に振れる。掘方は一辺約40cmの隅丸方形を呈する。深さは約60cm。柱穴には柱根（東側）および柱痕跡（西側）が残る（図Ⅱ-6）。直径はいずれも15cm程度。さらに西に延びる可能性がある。

**柱列SA11225**　調査区東南部で検出した。柱穴２基が約2.4m（８尺）の間隔で南北に並ぶ。さらに南北に延びる可能性がある。あるいは南側の柱穴の西4.8mで検出した穴と組み、南北棟建物の東側柱筋になる可能性もある。掘方は一辺約40cmの隅丸方形を呈する。深さは約60cm。南側の柱穴には、直径約13cmの柱根が遺存する。

### 藤原宮造営以前の遺構

**斜行溝SD11222**　調査区東南部、沼状遺構SX11221の下層で検出した西北―東南方向の素掘溝。約６m分を確認した。深さは15cm以上。古墳時代後期の須恵器がまとまって出土した。

**藤原宮廃絶後の遺構**

**井戸SE10768**　調査区西北部に位置する。第153次調査で西側約３分の１を検出しており、今回全体を検出した。掘方は一辺約2.5mの隅丸方形を呈する。井戸枠は一辺1.1mの方形縦板組横桟止めで、掘方の南に寄る。礫敷面からの深さは1.6m以上。掘方から染付片が出土しており、近世以後の遺構とみられる。

**時期不明の遺構**

**土坑SK11231**　第160次調査で検出した土坑。南北約4.0m、東西約3.5mの不整長方形で、南半が今回の調査区東北部におよぶ。断割調査の結果、礫敷面からの深さが約60cmであること、下層に別の土坑が重複していることが判明した。遺物はほとんど出土していない。

**土坑群**　調査区西北部において、礫敷直下の整地土上面で、時期不明の土坑を複数検出した。一辺約30cmの隅丸方形を呈し、縁に幅約５cmの灰色砂がめぐる。深さは約20cm。

**（桑田訓也）**

## ３　出土遺物

**瓦磚類**　本調査区で出土した瓦の種類と点数を表Ⅱ-４に示した。以下では造営期の軒瓦と礫敷層から出土した鬼瓦について詳述する。

第二次整地土以前の瓦溜SX11229からは、軒丸瓦6233A、6274A、6275H、6279B、軒平瓦6643Aa・Cのほか、熨斗瓦、面戸瓦、隅切平瓦が出土している。礫敷広場下層の第二次整地土では、軒丸瓦6275B、6279B、6281B、軒平瓦6561A、6641C・E・F、6642、6647Ca、熨斗瓦、面戸瓦が出土した。

SX11229出土の軒瓦は、いずれも宮大垣および宮城門所用であり、6233Aは日高山瓦窯産、6274Aは砂粒を多く含む粗い胎土のQグループ、6275H、6279B、6643Aa・Cは胎土に砂粒を多く含み、クサリ礫がないN/Pグループに属する。一方、第二次整地土出土の軒瓦には大垣・宮城門所用の6279Bや6647Caを少量含むが、朝堂院所用の6281B、6641C・E・F、朝堂院で比較的多く出土する6561Aが目立つ。

藤原宮造営期の遺構から出土した瓦の分析によれば、藤原宮所用瓦は前後２時期に分けることができる[4)]。造営期前半の軒瓦は大垣・宮城門所用瓦で、日高山瓦窯、牧代瓦窯、N/Pグループ、Qグループのほか、大和盆地以外に生産地がある。造営期後半は大極殿院、朝堂院などの宮中枢部所用瓦の生産が開始され、その生産地は高台・峰寺、安養寺、内山・西田中の各瓦窯が中心となる。SX11229からは造営期前半の、第二次整地土からは造営

**表Ⅱ-４　第179次調査出土瓦類集計表**

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | その他 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型　式 | 種 | 点数 | 型　式 | 種 | 点数 | 種　類 | 点数 |
| 6233 | A | 1 | 6561 | A | 7 | 面戸瓦 | 15 |
| 6271 | B | 1 | 6641 | A | 1 | 熨斗瓦 | 25 |
| 6273 | B | 2 | 6641 | C | 3 | 鬼瓦 | 1 |
| 6273 | | 2 | 6641 | E | 2 | 隅切平瓦 | 5 |
| 6274 | A | 6 | 6641 | F | 2 | ヘラ描き平瓦 | 12 |
| 6275 | A | 5 | 6642 | A | 2 | 磚 | 1 |
| 6275 | B | 3 | 6642 | | 1 | 不明道具瓦 | 4 |
| 6275 | H | 1 | 6643 | Aa | 4 | | |
| 6275 | | 2 | 6643 | C | 2 | | |
| 6279 | A | 2 | 6643 | D | 2 | | |
| 6279 | B | 4 | 6643 | | 1 | | |
| 6281 | A | 1 | 6646 | B | 1 | | |
| 6281 | B | 1 | 6646 | E | 1 | | |
| 6281 | | 1 | 6647 | Ca | 1 | | |
| 不明 | | 5 | 不明 | | 3 | | |
| | 計 | 37 | | 計 | 33 | 計 | 63 |
| 重　量 | 丸　瓦 | 185kg | 平　瓦 | 595kg | | | |

**図Ⅱ-８　本調査出土の円形粘土塊（下）と第160次調査出土の把手（上）**

**図Ⅱ-９　第24・27次調査出土鬼瓦裏面の円形粘土塊**

期後半を中心とした軒瓦が出土している。

礫敷層からは鬼瓦の一部が出土した（図Ⅱ-８下）。平面形は不整円形を呈し、長径は10.5㎝、短径は9.2㎝、厚さは4.5㎝である。これを円形粘土塊と呼ぶことにする。

断面形はやや末広がりの台形状を呈する。底面、側面は剥離しているが、上面には横方向に貫通する凹帯があり、その内面は黒色を呈する。胎土には少量の白色砂粒とクサリ礫を含み、焼成はやや軟質である。

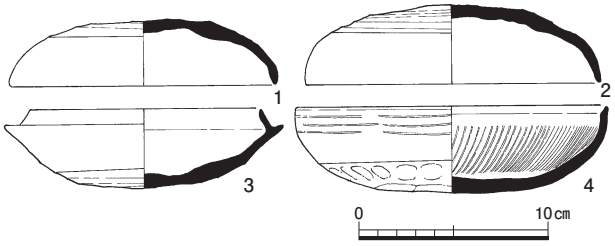
この遺物は藤原宮第160次調査出土の半環状把手と接合した（図Ⅱ-８上）[2]。また、同様の円形粘土塊は藤原宮第24・27次調査区出土の重弧文鬼瓦の裏面にもあることから、把手と鬼瓦本体を接合する部位にあたることがあきらかになった（図Ⅱ-９）。円形粘土塊上面の凹帯は把手を貫通する孔の下半部である。技法の共通性からみて、本調査区の円形粘土塊も重弧文鬼瓦の一部とみてよいだろう。第160次調査区で出土した重弧文鬼瓦片[2]も本調査区の円形粘土塊と同一個体の可能性が高い。

**（今井晃樹）**

**土　器**　整理箱で16箱の土器が出土した。これらは朝堂院朝庭の礫敷と第二次整地土、沼状遺構SX10820埋土のそれぞれから出土したものが大半を占めるものの、大部分は小破片である。これとは別に、藤原宮造営期以前の遺構・堆積土から完形に近い土器が若干出土したので、以下に記載する（図Ⅱ-10）。

１～３は、須恵器杯Ｈとその蓋。杯Ｈ蓋（１・２）は頂部を右回りのロクロケズリで整えるもので、口径は１が14.0㎝、２が15.5㎝。杯Ｈ（３）は口縁部の立ち上がりがやや短く、底部外面を右回りのロクロケズリで整形する。受け部での口径は14.0㎝。いずれも沼状遺構SX11221よりも古い斜行溝SD11222から出土。

４は土師器杯ＣⅠで、底部は１方向のヘラケズリを一部に施すが、他はユビオサエのままとする。口縁部には粗いヘラミガキがある。内面には一段放射暗文を施す。




図Ⅱ-10　第179次調査出土土器　１：４

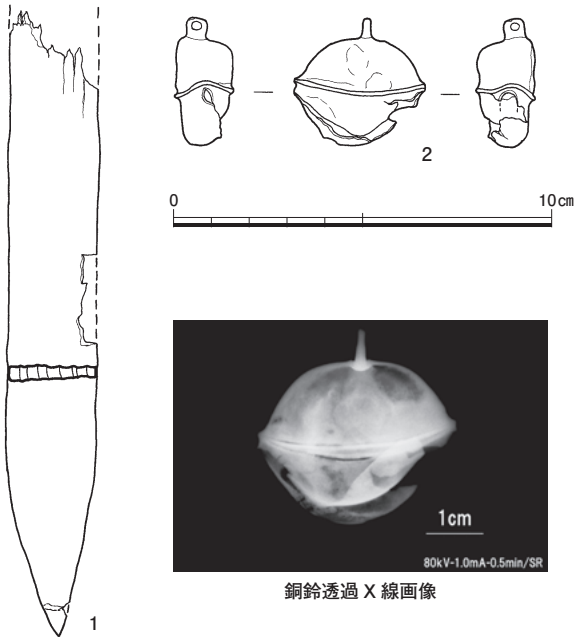
SX10820の下層の第一次整地土より出土。

１～４の土器は藤原宮造営にともない、沼状遺構が木屑混じりの整地土で埋め立てられるよりも古い段階で埋没したものである。２は６世紀後半、１・３は６世紀末から７世紀初頭、４は飛鳥Ⅲに属するとみられる。

**（森川　実）**

**金属製品・木製品**　沼状遺構や斜行溝SD10801Bを中心に大量の木屑が出土しているが、木製品そのものはほとんど出土していない。１は、沼状遺構SX10820の北端埋立土中から出土した、ヒノキの板目材（樹種同定は藤井裕之による）。厚さ４㎜前後の木片で、先端を尖らせる。上半部は欠損するが、斎串の下半部である可能性がある。２は、調査区東北部の床土中から出土した銅鈴。直径３㎝前後、土圧により押し潰れ当初の形状をとどめていない。厚さは１㎜前後。頂部に方形の紐をかしめ、腹帯は幅１㎜前後の細い突帯を１条巡らせる。現在、表面は褐色の錆で覆われており、鍍金の痕跡は確認できない。また、内部には土が銹着しており、Ｘ線写真でも丸が残存しているかどうかは確認できない。鈴口は紐に直交して穿たれており、端部は丸みを帯びるが、奈良時代の銅鈴のように円形の強い抉り込みはみられない。礫敷直上の床土中から出土したものであるが、藤原宮期のものである可能性がある。

**（廣瀬　覚）**




銅鈴透過Ｘ線画像

図Ⅱ-11　第179次調査出土金属・木製品　１：２

**獣　骨**　　礫敷や第二次整地土から、歯の破片が出土した。種まで同定できた資料は、すべてウマの歯であった。

**（山﨑　健）**

## 4　まとめ

**藤原宮期の東西柱列**　　藤原宮期の遺構としては、従来検出していた朝堂院朝庭の礫敷広場SH10800、および排水用の東西溝SD10785（礫詰暗渠）の続きを確認した。また新たに、礫敷上から掘り込まれた東西方向の柱列SA11220を検出した。長さは、確認できただけでも53mにおよび、さらに調査区の東に延びる可能性がある。どのような構造物となるかは不明であるが、約３m（10尺）という柱間に比べて、柱の直径が約10㎝と細く、掘方の深さも礫敷面から50㎝程度であることから、それほど重厚なものは想定しがたい。簡易な塀や幔幕の支柱など、仮設的な区画施設・遮蔽施設と考えておきたい。一方で、朝堂院北面回廊（大極殿院南面回廊）SC9000の中軸から南に約24m（80尺）の位置にある点からは、高い計画性もうかがえる。なんらかの儀式にともなう施設の可能性もあるが、具体的に絞り込むことは難しい。

朝堂院の北端で東西方向の柱列を検出した例としては、前期難波宮と平城宮中央区を挙げることができる。前期難波宮では、1990年度のNW90－30次調査において、東第一堂の北約4.0mで東西方向の柱列SA903001を検出している。この柱列は前期難波宮に関連する遺構の可能性があるが、難波宮下層遺跡の可能性もある[5)]。また、1970年度の第37次調査および1972年度の第37次補足調査において、後期大極殿の下層でSA903001の西延長部分の可能性がある柱列SA3741を確認している[6)]。平城宮中央区では、2005年度の第389次調査において、大極殿院南門のすぐ南で、東西柱穴列SA18800を検出している。大穴と小穴が交互に並び、大穴列が塀を構成し、小穴が塀の間柱となるとみられる。時期は不明であるが、奈良時代の遺構の可能性もある[7)]。これらの遺構は、朝庭にともなうものか不明であり、柱穴の規模や柱間など、今回の調査の事例とは異なる点も多いが、類例として留意しておきたい。

**造営期の様相**　　礫敷広場の下層では、大小複数の沼状遺構を検出した。沼状遺構SX10820は、従来の想定ほど大きな広がりはもたず、SX10820の周囲に３基の沼状遺構SX10883・SX11226・SX11221が隣接して存在する状況が判明した。これらの沼状遺構は、平面規模や深さは異なるものの、第一次整地土を掘り込んでいる点、木屑を多く含む土で埋め立てられ、その上面を第二次整地土が覆う点、肩付近に瓦を廃棄している場所がある点（特に顕著なものがSX10820北肩の瓦溜SX11229である）などが共通する。

なお、従来SX10820がおよぶとされていた調査区東北部の下層については、北排水溝および土坑SK11231断割トレンチの土層断面で東への落ち込みが確認できることから、別の沼状遺構が存在する可能性が高い。朝庭東北部一帯の下層が、沼状遺構の広がる区域であるという従来の認識には変更の必要はなかろう。

第163次調査では、SX10820の西南隅に隣接する位置で土坑SK10970を検出しており、両者が細い溝でつながっていることが確認されている[8)]。沼状遺構SX10883・SX11226・SX11221についても、SX10820とつながっている可能性がある。沼状遺構の堆積環境および性格については、土壌分析の結果を待って、あらためて検討したい。

**おわりに**　　今回の調査では、朝庭の空間利用のあり方や藤原宮の造営過程を考える上で、貴重な手がかりを得ることができた。しかしながら、東西柱列SA11220の機能や沼状遺構の性格などの具体的な点については、不明とせざるを得ない。周辺調査の成果を踏まえながら、今後とも検討を続けていきたい。

**（桑田）**

**註**

1）「朝堂院の調査―第153次」『紀要 2009』。
2）「朝堂院回廊・大極殿院回廊の調査―第160次」『紀要 2010』。
3）「朝堂院朝庭の調査―第174次」『紀要 2013』。
4）石田由紀子「藤原宮における瓦生産とその年代」『文化財論叢Ⅳ』2013。
5）（財）大阪市文化財協会『難波宮址の研究第十三―前期・後期朝堂院の調査―』2005。
6）（財）大阪市文化財協会『難波宮址の研究第十―後期難波宮大極殿院地域の調査―』1995。
7）「中央区朝堂院の調査―第389次」『紀要 2006』。
8）「朝堂院朝庭の調査―第163次」『紀要 2011』。